

指揮者  
柳澤寿男やなぎ さわ とし おに聞く

聞き手・小澤幹雄おざわ みきお  
音楽ジャーナリスト、エッセイスト

# バルカンの国々で オーケストラを 指揮する

音楽の都ウィーンを流れるドナウ河は、バルカン半島に入り、東西を横切るように流れる。日本人指揮者・柳澤寿男氏は、このバルカンの地でマケドニア旧ユーゴスラヴィア国立歌劇場に続き、コンツォ・フィルハーモニー交響楽団の常任指揮者を務め、自らバルカン室内管弦楽団を創設した。氏の音楽活動とこの地域への思いを聞いた。

コンツォ独立直後、初の定期公演を迎えるコンツォ・フィル。独立後の新しい国への希望からドヴォルザークの交響曲第9番『新世界』が選ばれた。第二楽章を念入りにリハーサルする柳澤氏

写真提供：柳澤寿男（以下も同じ）



ウィーン・フィルの演奏を聴いた夜  
「小澤征爾になる」と決めた

小澤 柳澤さんが指揮者になろうというきっかけは、私の兄の征爾の演奏会をウィーンで聴いたときだそうですね。

柳澤 1996年2月26日、初めての海外旅行でウィーンへ行ったことでした。自分の「二・二六事件」としてよく覚えています。

私は国立音楽大学トロンボーン科を出て、当時は日本大学大学院芸術学研究科に籍をおいていました。西洋音楽史の授業を受けていて、その先生がウィーンへ行くという話を聞いて、何を思ったか、突然いっしょに行きたくなり、2週間後には出発していました。機上で雑誌を見ていて、偶然にも到着するその日、小澤征爾さんとウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会があると知りました。着いてすぐに、先生とともに会場のコンツェルトハウスへ向かい、演奏会が終わって外へ出たときには、もう「自分は小澤征爾になるんだ」と決めていました（笑）。

小澤 その後、パリに留学なさったのですね。



やなぎざわ としお ●パリ・エコー  
ル・ノルマル音楽院に学ぶ。2005  
～07年マケドニア旧ユーゴスラ  
ビア国立歌劇場常任指揮者・首席  
指揮者。現在、コンヴォ・フィル  
ハーモニー交響楽団常任指揮者お  
よびバルカン室内管弦楽団音楽監督  
を務める傍ら、サラエヴォ・フィル  
ハーモニー、アルバニア国立放送  
交響楽団、テフタ・タシュコ・ユ  
ースオーケストラ・ミトロヴィツァ  
などに客演を果たす

撮影：高木あつ子（57ページ上も）

柳澤 ええ。最初はどすれば指揮者にな

れるのかもわからず、とりあえず小澤  
征爾さんのように髪を伸ばすところか  
ら始めました（笑）。鞆持ちになろう  
と、いろいろな指揮者を訪ねたのです  
が、ことごとく断られました。ただ一  
人だけ断らなかった方が佐渡裕さんで  
した。それから、指揮者の日常を見て  
学ばせていただきました。

しばらくたって、佐渡さんがレッス  
ンをつけてくださったとき、小澤さん  
のような服、髪型、しゃべり方で、小  
澤さんのように振りました。そうした  
ら佐渡さんがひと言、「お前は小澤征  
爾や」。それは悪い意味ではなかったの  
ですが、お前の音楽には色がないとも  
指摘されました。そこで、佐渡さんの  
いるパリへ留学して指揮の勉強をしな  
がら、同時にアシスタントをやらせて  
ほしいとお願ひしました。周囲のみな  
なは反対でしたが、私は強引に佐渡さ  
んについてパリへ行ってしまうました。  
パリでは狭い屋根裏部屋に住み、アシ  
スタントをしながら、エコール・ノル  
マル音楽院の指揮科に通いました。

小澤 そこでバルカン半島との縁が生まれ  
たわけですね。

柳澤 パリ留学中の99年、よく覚えている

のですが、同じ指揮クラスの留学生に  
ベオグラード（当時ユーゴスラヴィア連  
邦共和国の首都、現在はセルビアの首都）  
から来た女性がいきました。彼女は「ベ  
オグラードは今とても危険で、家族が  
とても心配だ」と話していました。し  
かし、当時の私には、彼女が何を訴え  
ているのが理解できず、「ああ、そう  
なのか」としか思えませんでした。

その前、96年にウィーンを旅行してい  
たときも同じような出会いがありまし  
た。ルーマニアからピアノで留学してい  
た15歳の少女が涙ながらに、隣国のユ  
ーゴスラヴィアでは、アイスクリーム型  
をした爆弾や爆弾が入った人形で子ど  
もたちが大勢亡くなっていると言っ  
てます。私はとりあえず慰めの言葉をか  
けましたが、正確には彼女が何を言っ  
たのか、わかっていなかったのです。

2007年にコンヴォへ行き、空爆  
で破壊された建物などを目にして、彼  
女たちが訴えていたことを初めて理解  
しました。99年当時、コンヴォ紛争で  
ベオグラードへ行なわれたNATOの  
空爆が、初めて自分とつながったので  
す。そのとき、彼女たちに親身になっ  
てあげられなかったことをひどく悔や  
みました。現地を訪れなければ理解で

きなかつた自分を恥じました。そして、  
日本人でもできることをやりたいと考  
え、コンヴォで暮らし、現地のメンバ  
ーと同じ釜の飯を食いながら、オーケ  
ストラをやるうと決意したのです。

ウィーンで小澤征爾さんになりたい  
と思ったときは、ドナウ河を見ながら、  
ウィーン・フィルのニューイヤーカー  
サートに呼ばれ、最後に『美しく青き  
ドナウ』を指揮する自分の姿を思い浮  
かべていました。しかし、その後、自  
分が同じドナウ河下流の旧ユーゴスラ  
ヴィアの国々で仕事をするようになる  
とは思ってもみないことでした。

「バルカン・メンタリテイ」と  
闘いながら音楽をつくる

小澤 バルカン半島での最初はマケドニア  
で、オペラの仕事が大成功を取めたそ  
うですね。

柳澤 たまたまハンガリーの音楽事務所に  
知り合いがいて、声をかけられました。  
自分が一番得意なのは『トスカ』だと  
言ううと、マケドニア旧ユーゴスラヴィア  
国立歌劇場へ行けと言われました。当  
時はマケドニアがどこにあるのかも知  
らず、あらためて地図で調べたものです。  
『トスカ』が成功して、そこで05年から



プリシュティナ近郊のセルビア人の住むグラツェニツァで警備にあたるKFORのスウェーデン兵士。指揮者と兵士、職業は違ってもお互いに平和を望む気持ちに変わりはない。KFORはセルビア共和国統治下にあったコソヴォ・メトヒヤ自治州（現・コソヴォ共和国）において治安維持を行なう国際安全保障部隊

首席指揮者を務めることになりました。しかし、常識・非常識が日本人とあまりにも違うために、とても苦労しました。彼らは「バルカン・メンタリテイ」という言葉を使います。例えば、練習のときも時間通りに集まらず、メンバーが10分程度、遅刻します。もっと遅れてくる人もいて、その理由が「マクドナルドに寄っていたから」だったり。ようやく集まると、演説が始まります。「われわれはこのような安い給料で働いているのか」と、延々10分、20分とやるわけです。そこからやっと練習がスタートするのです。

指揮者が話をしているのにお喋りをして聞いている、会議中でも携帯電話がかかってくると通話を始めてしまう、一度決めた演目がいつの間にか全部変わっている……。バルカンの人たちは、その言い訳に「バルカン・メンタリテイ」という言葉を使っていました。そんななかでオーケストラという共同作業をしていくのは大変なことでした。「音楽に国境があつてはいけない」とコソヴォ・フィルの団員は言った

小澤 マケドニアのコンサートホールは、旧ユーゴスラヴィアの国立歌劇場ですね。

柳澤 このような劇場があるのはすごいと思います。日本でも近年まで、国立歌劇場はなかったわけですから。マケドニアでは国の予算によって歌劇場、バレエ団、合唱団が運営され、500人以上のスタッフが働き、過去に上演したオペラの衣装もすべてそろっている。西側の伝統がかつての東側にもあつて、それが現在も残っています。また演奏するレパートリーも、マケドニアでもアルバニアでも、西洋の作曲家が中心です。

小澤 ハンガリーのコダーイ、バルトックにあたるような地元作曲家がいて、活躍しているのですか。

柳澤 マケドニア、アルバニアにも、それぞれの国の作曲家がいます。

小澤 歌手、演奏者ほか、メンバーは地元の人たちですか。

柳澤 そうだと思います。基本的にモノエスニックで、コソヴォの楽団にはアルバニア人しかいない（コソヴォのマジヨリテイはアルバニア人）。アルバニアの楽団にはアルバニア人。互いの交流があまりなく、隣の国の文化事情がよくわかりません。交流があまりないのは、過去の歴史的背景からだと思っています。ですから、私がマケドニアからコソヴォ

へ行くときも、マケドニアの人たちはコソヴォの事情をあまりよく知らないもので、心配な様子でした。当時、コソヴォは国連の敷地内で手榴弾が爆発するような時期でしたが、07年3月25日にコソヴォ・フィルハーモニー交響楽団で初めて指揮者として客演し、大成功して、住み込みでオーケストラをやっけてほしいということになったわけです。治安もよくない地域だし、電気も水もとぎれがちなので、最初は悩みました。決心したのは、ある団員の言動がありました。コンサートを2、3日後に控えていたとき、突然彼は「今、セル



マケドニア旧ユーゴスラヴィア国立歌劇場で柳澤氏が指揮したブッチーニの歌劇『蝶々夫人』。第二幕で使われる仏具などは柳澤氏が日本から持参した



〈右〉子どもたちの通学路には、かつての建設途中のセルビア正教の教会が今もなお残る。コソヴォの首都プリシュティナ  
 〈左〉メンデルスゾーンの『ヴァイオリンとピアノとオーケストラのための協奏曲』のリハーサルをするアメリカのピアニスト、デレック・ハンとコソヴォのヴァイオリニスト、シハナバディヴァクと柳澤氏

ピアノが攻めてきたら、私は楽器ではなく武器を持って戦いたい」と言うのです。私は愕然としました。コンサートは無事に終了しました。そして、その彼は涙目で言いました。「やはり音楽に国境があつてはいけません。ノーボーダーだ」と。それがすごくうれしくて、私はコソヴォでやる決意を固めたのです。

小澤 言ってみれば、楽団員はみんな難民ですね。

柳澤 99年にNATOの空爆でコソヴォ紛争が終わり、「お前も生きていたか」「お前もか」と、アルバニア人の弦楽器の奏者が13人集まり、2000年に結成したのが今のコソヴォ・フィルです。現在は34人になりました。

日本のオーケストラと大きく違うのは、彼らには笑いが絶えないことです。これはとてもおもしろいことだと思います。日本でも「最後は笑うしかない」という表現がありますが、さまざまな不幸を抱えながら、音楽をやりながら何とか暮らしていくときに、やはりユーモアはすごく大事だと感じます。オーケストラの練習中に停電になると、「コソ

ヴォ・フィルはお金がなくて、電気代を払ってないからだ」と言いながら、とにかく笑います。

また、ボスニア紛争で言われたジョークらしいのですが、家族も亡くし、建物も失くし、外でたき火をして生活をして、最後には薪も家具も本も、燃やせるものはすべて燃やし尽くした。



そんななかで、一番よく燃えたのはレニンの本だったよ、というのがオチだったりするわけです。最後は笑うしかない、最後に残ったものがユーモアであるというのが、文化の底力だと思います。コソヴォへ行つてから、それを強く感じるようになりました。

独立の日、コソヴォ・フィルはベートーヴェンの『第九』を奏でた

小澤 08年の2月17日、コソヴォは独立を果たしました。そのときにベートーヴェンの『第九』（交響曲第9番）を演奏なさつたですね。

柳澤 独立をするときには、とにかく『第九』をやると決めていたようです。この作品は、コソヴォでは演奏されたことがありませんでした。多くの人数を必要とする大規模な曲ですが、コソヴォ・フィルはメンバーが十分とは言えない。しかも、戦後復興のなかで『第九』をやるのは大変なことなのです。しかし、フランス革命があつてベートーヴェンが『第九』を書いたといういきさつがあるので、自分たちが自立し、皆と協調していくという意味で、コソヴォ独立にはふさわしい曲だと考えました。

小澤 ベルリンの壁がなくなつたときも、バースタインが『第九』を指揮しました。ぴつたりの曲ですね。

柳澤 そうですね。コソヴォ独立の日がいつかは、セキユリティ上の都合で、数日前までメディアを含め、誰も知りませんでした。しかし、コソヴォ・フィルはさらに数日前にわかっていました。15



↑2008年2月17日15時、コソヴォはついに独立を果たした。写真は当日の午前中。独立の父とも言われるルゴバ元大統領の肖像の前で、今か今かと独立の瞬間を待つ人々  
 ・サチ首相、セイディウ大統領の演説に続いて行なわれた独立記念演奏会。オーケストラと合唱団の後ろには上からアルバニア語、セルビア語、英語で独立記念演奏会と書かれている。平和の象徴とも言うべき『第九』が奏でられ、柳澤氏はこの歴史的瞬間を見守った。指揮はコソヴォ・フィル音楽監督バキャリ氏

時に独立宣言があり、19時からコソヴォ・フィルの「Concert of the Day of the Independence」をやると決まっていたのです。練習の必要上、アメリカン・オフィスからコソヴォ・フィルへの依頼によって早く知らされたわけです。  
 『第九』の「歓喜の歌」の一番有名なメロデー「Freude, schöner Götterfunken」の部分だけを演奏しました。そのさい、マイノリティーへの配慮から、原語であるドイツ語でやり、アルバニア語では歌ってはいけないという指示がありました。  
 当日はファトゥミル・セイディウ大統領、ハミム・サチ首相の演説があり、コソヴォ・フィルが演奏をしました。私は練習をしただけで、本番は客席で見えていました。国家行事には参加しないほうがいいだろうというコソヴォ・フィルの配慮からです。感動的な演奏でした。私は練習のときから、『第九』という平和のメロディを奏でながら、コソヴォにもこういう日が来たのだと感動で涙があふれていました。  
 バルカンの名を持つオーケストラを世界各地に連れていきたい

小澤 現在はコソヴォ・フィルでの指揮の

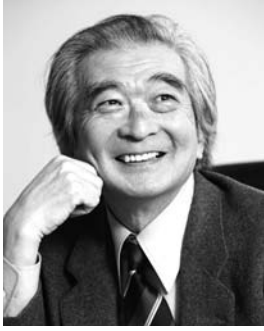
ほか、バルカン室内管弦楽団を主催していますね。

柳澤 バルカン室内管弦楽団は07年6月に立ち上げました。07年6月の創設コンサートはマケドニア人11人、日本人3人で行ないましたが、翌年はコソヴォ・フィルの人たち（アルバニア人）にも入ってもらいました。やがては、セルビア人、ボスニア人などにも入ってほしいと考えていますが、時間はかかると思います。

小澤 対立した民族が参加するオーケストラを、日本人がつくるのはとても意義があることですね。

柳澤 オーケストラを立ち上げた目標は二つあります。一つはバルカンの民族共栄、もう一つはオーケストラという共同作業を成立させるための「バルカン・メンタリティー」からの脱却です。それで、あえて楽団名に「バルカン」の語を冠しました。

このオーケストラは、歴史的背景から対立していたそれぞれの民族同士が協力しあって共同作業を成立させなければなりませんから、家族以上の結びつきがないといけないと考えています。そのため、メンバーは通常のオーケストラという訳にはいきませ



おざわ みきお ●「小澤幹雄のやわらかクラシック」「芸術ジャーナル」などラジオ番組のパーソナリティ、コンサートの司会、音楽誌の執筆などで活躍。著書に『やわらかな兄征爾』『小澤幹雄のやわらかクラシック(正・続)』『松本にブラームスが流れた日ー小澤征爾とサイトウ・キネン・オーケストラ』ほか

ん。私が指揮者として客演し、そこで演奏家と友人になり、お付き合いをして、この人物ならやってくれるだろうというところまで行かないと、このオーケストラには誘えないのです。民族が敵対しているなかで不用意なことを言えません。ただ、お互いに音楽を奏でていくなかで、少しでも心をともしてきたらという願いから、このオーケストラを立ち上げたわけです。

私がやっているのは、1人でも2人でもそのような人が増えていけばいい、という活動です。コソヴォ・フィルには、「ノーボーダーだ」と言った人が1人いたわけですが、たった1人ですが、楽器を置いて、子どもにさよならを言って、戦争に行ってもいい、自分はそれで死んでもかまわないと言っていた人が、音楽を通じて変わってくれたのは事実なのです。

オーケストラは社会生活です。そのなかで、1年に1度の演奏会のためにきちんと練習をし、みんなが同じ方向に

向かって行かなければ成立しません。バルカン室内管弦楽団をやるうと言っても、例えば郵便事情も悪いですし、楽譜も全部コピーして自分が現地まで届け、会場探しもすべて自分で行なわなければなりません。しかし、そのようにしてでも、クオリティの高いものをつくりたいのです。

私は、バルカン室内管弦楽団の活動



バルカンの民族共栄を願って、2006年にバルカン室内管弦楽団を設立。今年5月にはバルカンの民族対立の象徴の地とも言われるミトロピツァで開催される

を通して、バルカンのことを知ってもらいたいのです。初めて私がウィーンを訪れたとき、隣国のユーゴスラヴィアについて無知だったのと同様、ウィーンの人たちのなかには、隣国は危険だけれど、私たちにはよくわからないと言っている人もいます。彼らはドナウ河はウィーンの人たちの魂だと言っています。そのドナウ河は流れを下るにつれ、コソヴォ紛争で空爆を受けたセルビアを流れ、さまざまな支流から水が流れ込み、最終的にはルーミアニアのデルタ地帯を通り、黒海へ流れていきます。そこには昔からその水を飲んでいる村の人たちもいます。例えば、水質汚染が進み、その人たちが最近魚が獲れなくなったと言っていることを、先進国の人たちが知るの大切なことだと思えます。ウィーンにも、バルカン半島にも、同じドナウ河が流れているのです。

そして、「バルカン」の名を背負ったオーケストラを、アメリカやウィーン、パリやローマなど、世界各地に連れていきたいと思っています。バルカン室内管弦楽団というオーケストラが奏でる温かい和の音楽を、世界中の人たちの心に響かせたいと思います。●